

6) 齋藤 哲也 様

昭和 41 年の卒研ですが、大変申し訳なかったと反省しております。3年ぶりの出席になります。今井先生から、折角科学者の心意気を習ったのですが逸早く脱落し、サラリーマン生活をエンジョイしてしまいました。ソニーも早期退職して、一金属プレスメーカーの会社に入って、2年間上海の工場立ち上げて、日本企業が我も我もと進出した時期で、プレス機械は新品が原則でした。

4年前に日本に帰ってきましたが、もう仕事はやらない、と決めました。そこで「ハーモニカを始めます」と皆さんに宣言しましたが、あれからお陰様でハーモニカ界との付き合いが出来ました。ハーモニカの町、厚木には月に何回か勉強に行き、ハーモニカ協会の会員になっていますが、去年、神奈川県西湘地区ハーモニカの交流会を作り、その会長に就任いたしました。その関係もあって、今年4月に全日本ハーモニカ連盟の幹事に推挙されまして、今、地元の自分のサークルと隣町の二宮町で15名、中井町で19名を指導しており、月に2回ずつやっています。隣町などの指導では思わぬところで副収入が入り、指導料をいただき恐縮しております。

ハーモニカには、副音、テンホールズ、クロマチック、バス、アルト、バリトン、コード、などの種類があり、今はそれでアンサンブルが出来ます。20人からの規模になりますとそれなりの指導をしないといけません。これも結構大変です。自分でもソロをやりたいんですが、やっといろいろの奏法ができるようになりました。ただ、人を纏めるといことは、大学時代から学んでいたことが今活きていると思っています。畑は違っても、何か一つの目的を達成しようとするときには、どうしても人と人とのつながりがあり、それが非常にありがたいと思っています。何かで、ハーモニカで演奏の機会がありましたらご一報下さい。その近所のサークルの人とコンタクトいたします。

最近、老人ホームとか病院とか介護施設から声がかかってボランティアに行くんですが、ハーモニカの演奏中に不思議なことが起こりました。演奏が始まると一番前の席にいたご婦人が歌い始め、しかも手で指揮を始めたんです。後で看護婦さんに聞いたところ、その人は重度の認知症で、看護婦が話しかけても殆んど反応のなかった人ですが、昔覚えた曲になったのか思い出したんですね。元高校の音楽の先生だったらしいのです。音楽には凄い力があるのだと改めて認識し、頑張りたいとその時感じましたし、これからもこの世界でやっていきたいと思っております。

折角今井先生からいろいろの科学技術を学びながら、別の世界に行ってしまいました。

(今井先生：会報第4号には齋藤さんが通研で卒研をした時のことをきちんと「卒業研究の一年間」としての文章として残している それを下記に再掲する)

それに中国に行かれて、齋藤さんが直接中国人の採用の面接に当たられたということは凄いことですよね。)

中国の上海では400人を面接した。身分証明書を出しなさい、と言ったらくしゃくしゃになったのを出してきた。それを見て即座に不採用を決めた。身分証明書を大事にしない人は何かあるな、と感じ、判断した(齋藤)。それも技術の一つです？

会報第4号(2004.3.31発行)より再掲

卒業研究の一年間 於 電気通信研究所 齋藤哲也

第二回懇親会(2003.7.25)の新幹事挨拶では、ご自身が当日持参された右掲のアルバムに記入されていたメモのお披露目があり、メモを読みながら当時を回想されておりました。下記に写真とそのメモをご紹介します(坪井転記)。

《 S.40年3月より始めた卒研も S.41年3月には終えた。この間、振り返って見ると長かった様な、短かった様なところ。》

外研(外部卒業研究)という特殊な立場で4月からスタートした。もちろん自ら進んで。意欲は十分有った。がしかし、自信などは全く持っていなかったのだから今考えると無茶をしたと思う。

クラブ(音楽)にばかり憂き身をやつて勉強すらやっていたのだから、ましてや研究など



出来るはずが無かった。3ヶ月位経った頃からやる気を失いつつあった。自分が今何をやっているのかを失いがちだった。それでも12月、1月頃になって、卒論としてまとめる段階へ来て、あれもしておけばよかった、これもしておけば良かったなどと悔やんだが後の祭りだ。

そんな訳で気持ちの上ではこの一年間が長く、研究の上では短かった。一つのテーマについて調べるのにはかなりの探究心がなければならぬ。自分なりの研究は出来なかったが、本の読み方、研究とはどういうものか、その方法、データの解析法、論文のまとめ方など、色々学び取るところがあった。先生(今井博士)と一対一でご指導されたのは心強いものがあった。決して無駄ではなかった一年間である。》

7) 安原 信彦 様

お世話になりっぱなしで、何も出来ないことを申し訳なくしております。



左：安原様 右：帯谷様

このところ両親の在宅介護をずっとしてきました。父が95歳まで生存しましたし、母に対してもここ10数年間、24時間の自宅看護をしてきて、昨年やっと一区切りついたところです。父母の看病から、人はいかに歳を取って行くかを勉強させてもらったわけです。介護も一区切り付いたものですから、今は週3回仕事をしています。しかしまた来年からは女房の方の母親の介護をやっていく必要があるのではないかと考えております。身体が不自由だったり、人との会話が出来ないという中で結構色んな発見などがあり、自分

だったらこうして行きたい、という経験をしたことには、私にとってありがたい時間を過ごせたものと思っています。そんなことが現在の心境です。

8) 帯谷 達郎 様

会報第4号に「私のレーダ」という題名で掲載した、その時の記念の銀製灰皿の現物を持参いたしましたのでご覧になって下さい。

卒研生として安原さんと共に今井研究室で一年間お世話になりました。卒研のテーマは、「エサキダイオードのマイクロ波特性の評価」で、その時の研究指導員がH.16年11月にお亡くなりになった新妻さんでした。研究の傍ら絵画にも精通しており、新妻さんからはいろいろと薫陶をうけました。

卒研の後半では、エサキダイオードのマイクロ波発振素子としての応用研究に入り、これはその後私が進む事になる「船舶用レーダ装置の開発」に進む動機となりました。

昭和42年に卒業し、東京レーダという会社に就職しました。仕事は一貫してレーダの開発業務を担当し、そこに12年間いました。

英国のRacal Decca社にレーダ指示器を納入しましたが、納入するまでにたいへんな苦勞をいたしました。ヨーロッパの人とはとにかく理詰めで、非常に厳しいです。

話は逸れますが、津田清一さんという人の書いた『幻のレーダを作る』という本(現在は復刻版として、『幻のレーダ・ウルツブルグ』: 津田清一著、192ページ 定価1,785円 CQ出版社)がありました。そこには、第二次世界大戦の時にドイツのテレフンケン社のトーマスというエンジニアが日本に来て日本無線のエンジニアに計画書を出させた。計画書通りに作らなければドイツ人は気が済まない。

決めた仕様にプラスしたときにも、徹底的に追及する。なぜ、なぜ、なぜ、です。最終的にはそれを受け入れる。日本人はフレキシブルでいいんだけど、一旦決めたスペックをすぐに変えてしまう。そこで